

# 明星大学蔵 奈良絵巻『十番切』釈文

柴田雅生\*

奈良絵巻『十番切』は、『會我物語』に由来する幸若舞の詞章を美麗な絵巻に仕立てたもので、後世の會我物に大きな影響を与えた作品である。

ここに翻字するのは、本学青梅校図書館に所蔵される奈良絵巻『十番切』の全文である。『十番切』の奈良絵巻は本書の他に存在が知られていない。原態を尊重しつつも読みやすさを優先し、釈文として掲載することとした。また釈文の末尾に挿絵をまとめて白黒で掲載した。

## 書誌

体裁 二巻。紙高三三・一糎、長さ(上巻)一二米六二・四糎(下巻)一一米三八・六糎。江戸時代前期の写本と見られる。

表紙 上下巻とも、朝顔に兔を配した文様の練色地緞子表紙。見返しは金紙。

料紙 金泥による草木の下絵を有する鳥の子紙。紙背にも金の切箔を散

らす。

外題 (上巻)「十番切 上」

(下巻)「十番切 下」

本文字高 約二八糎。

挿絵 合計十三図。

上巻 六図

下巻 七図

備考一 石川透氏の分類(石川透「奈良絵本・絵巻の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、二〇〇三年八月))に従えば、縦型特大型に属する。

備考二 本文は寛永版本とおおむね一致するが、細かい異同が非常に多い。

また、挿絵を配置するための配慮か、挿絵の前または後に散らし書きの部分がある。

備考三 挿絵は土佐派の流れを汲む絵師の筆になると思われる。背景や着物の模様、端役の人物といった細部までを精密に描き、霞には金箔を散らす。

## 凡例

一 本文・挿絵を交互に配置する順に従って、上下巻ごとに通し番号を振り、該当部分の前に(上・詞一)(上・絵一)などと示した。挿絵はまとめて末尾に掲載した。

二 改行は原本に従う。散らし書きの部分は原本の配置を概略で再現す

るよう努めた。

三 本文は可能な限り原本に忠実に翻字し、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。不審の箇所については、(ママ)を右傍に付した。

四 翻字は、現行の文字字体に翻刻することを基本としたが、「經」「當」などの旧字体等の異体字を残したところがある。変体仮名については「ハ」の字体を残した。

五 「見」「氣」などの、漢字か仮名か判別しにくいものについては、字義に即した使い方の場合に限り漢字として翻字した。

六 繰り返し符号(踊り字)は、「々・々」「く・く」(くの字点)「々」を用いた。「と(二の字点)」は用いず、「々」で代用した。

七 原文には濁点や句読点、振り仮名・振り漢字などは付されていない。翻字に際しては、読みやすさを優先させて、便宜的に、句読点・濁点・会話部分などを示す鉤括弧などを加えた。また、仮名が連続して文脈が読み取りにくい場合には、振り漢字を( )に入れて加えた。

八 挿絵計十三図のうち、三図(上・絵三、上・絵四、下・絵一)は、他の挿絵の二倍弱の長さを有する。他の挿絵と同じ縮尺を維持するため、左右に分割し、通し番号の後に(右)(左)を付記した。

釈文

上巻

(上・詞一)  
 けんきう(建久)四年五月廿八日の夜半ば  
 かりの事なるに、曾我きやうだい(兄弟)の  
 人々ハ、親のかたきすけつね(敵祐経)をおもひ  
 のまゝにうちすまし、小柴のかげ(蔭)にぎ  
 つとひき、しばらくいき(息)をつぎたまふ。  
 すけなり(助成)おほせけるやうハ、「本望をバ  
 とげぬ。いざや、こゝにてはらをきらん」。時  
 宗うけたまはり、「御でうもつともにて候へ  
 ども、とてもしぜん(自然)命にて、御料(巻)を一刀  
 うらみ申、名を後代にのこすべし。  
 いかゞ」と申たりけれバ、すけなり(助成)きこ  
 しめされて、「げに、これはいはれたり。  
 たゞし、おやのかたきにとどめ(刺)をさして  
 ありけるか」。時宗うけたまはり、「あれ程  
 になり候らいて、なにのしさい(子細)の候べき」。  
 すけなり(助成)きこしめされて、「それはさも  
 なし、時宗。あけてじつけん(実検)あらんとき、  
 『あはてたるか、おくれたるか。とどめをさして  
 うちすてにしたり』なんどいはいはれなば、  
 かばね(屍)のうへのちじよくたるべし、いかゞハ

せん」とのたまへば、「そのぎにて候ハ、しば  
らく御まち候へ。とどめをさしてまいらん」と

(上・絵一)

(上・詞二)

ありしところ(所)に立かゑり、たいまつ(統松)つ  
とふりたて、すけつね(祐經)をみてあれば、  
あともまくら(枕)もみもわかず。されども、  
しがいをひきあげて、むなしきかほ(死骸)を  
つくづく(冥途)と見て、「かまへてめいどく(泉)を  
せんまで、我等(罪科)うらむることなかれ。日比  
つくりしつみ(只今)とがの、たゞいまむくうと  
おもふべし。われらがちの河津殿に、た  
むけん(名刀)のためのめいたうなり。さこそそん  
れう河津殿、うれしくおぼしめさるらん。  
いひもあへず、時宗(腕)の刀(馬手)をするりと  
ぬき、弓手(馬手)の下の下よりもめてへと  
れと、三刀(刺)さす。刀目(重)がかさなりて、口と  
ひとつに成にけり。

(上・絵二)

(上・詞三)

あけてじつけん(美)ありし時、「よひのさしきの

ざうごん(雑言)に、口をさかれけるか」と、御ひやうぢ(評  
定)なり。されども、遊女式人が、はじ  
めをハリをかたるにぞ、とどめにこそは  
なり(晴)にけれ。よひにははれてありけれども、  
かたきうちける其時刻に、空かきくも  
り、五月雨(卯花)うのはなくだしふりにふる。  
つじ(辻)の(かざり)火、一度にばつときえけ  
れバ、東西(俄)にわか(闇)にやみとなつて、せんご  
もさらにわきまへず。されども、おもひきり  
ぬるみち、大音(只今)あげて申す。「たゞいま、  
御れう(寮)のかり屋の御前(親)にて、おやのかたき助  
つね(経)をうつて出るつはものを、いかなるものと  
思召(孫)伊豆の国の住人伊藤がまご、河津が子、  
十郎(郎)すけなり、五郎時宗、我等(成)なり。當君の御  
内に弓取(給)おはせぬか。など出合(討)てうちとどめ、  
名を後代(暗)にあげたまへぬぞ」と、こゑ(降)く  
によば(呼)る。くらさはくらし、雨(降)はふる。御  
陣(俄)にわか(震)にしんどうし、弓一張、太刀(振)一ふりに、  
二人(乘)三人とりついて、我が人(鞭)のとうばひやう。  
つなぎ馬(味方)ののりながら、むち(打)をうつものも  
あり、みかたどしが(含)をりあひて、かたきとおもふ  
者(不覚)もあり。前後(上)ふかくにひしめいて、うゑ  
をした(下)へとかへしけり。されども、一番(大)  
らこの平(馬)のせう(九)となつて、「夜(討)うちは  
何者(我)ぞ。われ(前)が目のまへ(狼藉)にて、らうぜき

をばせさすまじい。手なみのほどをみ(見)せん」とて、おごゑをあげて切て出る。すけ(助)なり、御覽じて、「かほどにおほき人中に、(名乗)老人なのつて出るこそ、たぐひすくなき(類)(少)弓とりなれ。曾我の十郎、これにあり。うけてみよ」というまゝに、小柴のかけよりつと出て、もつてひらいて、ちやうどうつ。弓手のうでくびうちをとされて、ことばにハにざりけり、はや、まくのうちゑぞひきにける。二ばんにあいきやうの三郎となつて、五郎にむざとわたり相、こびんをきられひいて入。三ばんに御所がたのくろや五となつて、十郎殿にわたりあい、かたさききられひいて入。

(上・絵三)

(上・詞四) 四番にもてぎ殿、五郎にむざとわたりあい、(茂木)ひざのくちをわられて、御内をさして引たまふ。五ばんのたびには、伊勢の国の住人に、よし田の三郎もろしげ、十郎殿のにわたりあひ、たかも、ながれひいて入。六番のたびにハ、吉川となつて、五郎にむざとわたり相、(諸)もろひさながれひいて入。七番にハしなが

川(名乗)わたなのつて、十郎殿にわたりあい、めてのこ(馬手)わきをきられて、まくのうちへぞひきにける。八番のたびにハ、かいの国の住人に、市川のべつたう太郎たぐみ、大おんあ(別)げていひけるは、「夜討といはんに、なにほどの事のあるべき」と、おごゑをあげてきつて出る。時宗、これをき、(開)「なんぢハ、(音)をとにきこえたるうすいのたうげなんど(盗)にて、ぬすみこそふなりとも、はれわざ(能)のきりあいハ、これはじめにてあらんに、(初)手なみみせん」といふまゝに、もつてひらひて、ちやうどうつ。ほそくびちうにうちをと(並)されて、あしたの露とぞきえにける。(朝)九番につくしむしや、うすきの七郎ため(筑紫)(武者)(白杵)(為)しげ、十郎殿にわたりあい、まつかうわられ、(重)ひいて入。十ばんのたびには、伊豆国の住人に、(三)にたんの四郎たぐつな、大おんあけていひけるハ、「なにさま、東西くらうして、ものあひの見へぬに、(統)「たいまつだせ」とよば(出)たり。すけなり、きこしめし、(助)「たいまつこ(助)のみするやつに、手なみのほどをみせん」とて、(違)入ちがえてきりむすぶ。天地にひらめく太刀(違)かけハ、たぐ電光のごとくなり。そのひまに(統)「たいまつをわれも」とさし出す。えびら、(統)うつぼ、みの、かさ、ましてからかさなどをバ、よき

(上・絵四)

(統 松) たいまつと火をつくる。まんどうゑにハこと  
 ならず。いとゞ勇兄弟が、この火のひかりに  
 ちからを憑て、さんぐにきつたりけり。  
 龍が雲をひきつれ、とらが風に毛をふ  
 るつて、はんくわいがほこをふり、長良が  
 いきほひも、これにはいかでまつさるべき。  
 その夜、五郎が手につけ、五十一人に手を  
 おうする。直にしするはたゞひとり、別當  
 太郎ばかりなり。「とても今夜はすこす  
 まじ。つみづくりに」とおもひければ、人を  
 さらにきりとめず。名字を名のつ  
 て出るをこそ、十人とはしるされけ  
 れ。きやうだいが手にかけて、やみうちの  
 ずて刀、かすをもしらぬ所なり。さて  
 すけなりと忠綱、こゝをせんとくたくかひ  
 けるが、忠綱、すこし手おひ、家までぞ  
 十郎殿いとま申て「さらば」とて

とつてかへして、  
 ひいて引。祐成  
 つゞひて、  
 おつかけなさけ  
 なし。にたん、

(上・詞五)

「とても今夜はすこすまじい。名もなき  
 以下のざうひやうのその手にかけて、ころ  
 さんより、かへしあわせてせうぶをせよ、  
 忠綱」とて、おつかくる。二たん、「げにも」といふ  
 まゝに、とつてなをして切むすぶ。少あしだち  
 かたさがり、うわ手になつて十郎殿、にたん  
 を下へおいをろさんと、はしりかゝつてうつ  
 太刀を、たゞつな、さらりとうけながし、つか  
 をついで、すそをなぐ。十郎のめてのちか  
 らあし、ひざのくちをさし下げ、づんど  
 きつてぞおとしける。弓手の足ばかり  
 にて、半時おどつてたゝかうた。これや  
 この、れうわうの暮日にむかうほこのて、  
 入日をかへしひとおどり、うしろをふせぎ  
 こそ刀、百手をくだきたゝかえど、弓手の  
 足ばかりにて、さのみはいかでこらうべき。  
 いぬいにどうどまるび、「あたりに五郎や  
 ある。すけなりこそたゞいま、にたんに  
 あいてうたれさえ。おなじよみぢといひ  
 ながら、忠綱にあひてうたるれば、うらみ  
 とハさらにおもはず。ごへんハ命を全して、  
 君の御前にまいりつゝ、われらがありさま  
 申てしね。はやくびとれや、忠綱」。にたん、  
 くびをうちおとす。まんずる年は貳十二、

おしまぬものはなかりけり。去間、時宗(備)ハ大ぜい(勢)の中にてたかひけるが、すけなり(助)のさいご(最期)のこと葉をき、はやうつたちも(言)よ(弱)はり、ぜんご(前後)ふかく(不覚)になりければ、「かくて(叶)ハかなはじ」とおもひ、仇を四方へおつちらし、(御内)みうちをさしてきつて入。爰に御所の五郎丸と申て、十八さい(歳)になりけるが、八十五人が力なり、はらまきのそのうへ(薄)にうすぎぬかづき、かみゆりさげ、とある所にひつそうて、今やおそしとあいまつる。これをばゆめにもしらずして、つま戸をばつとけやぶつて、御内をさしてきつて入。五郎丸やりすごし、「怒たりや、あふ」といふまゝに、ゆんですがりにむずとだく。時宗、これを見て、「あら、口惜や。女とおもひみ(見損)そんじて、いだかれぬるよ」とこうくわいす。されども、ものゝかずにせず、ちうにづんどひつたて、七八間ははしりけり。五郎丸、これを見て、かなハじとぞんずれ(存)バ、「夜討をばくみとめたるぞ。おりあへやつ」とよ(呼)はつたり。其こゑ(声)にしたがつて、我もおぼしき大力、七八人おりあひ、手取(足取)あしとり、なわか(繩)けて、大しやうどのへおつたつる。むね(無念)たぐいはまさりけり。さるあいだ、よりとも、夜うちまぢかくまいるよしを

きこしめし、御(着背長)せながをめされ、小長刀ひきずつて、ゆるぎ出させたまふ。爰に、おほとも(大友)の市法師と申て、九つになりけるわら(童)ハ、君の御前にかしこまり、「さかしき申事にて候へども、すでに君ハせい(征夷)いしやうぐんと御わたり候へば、野心の者などをば、いながらせいしたまふべきに、かほどの事なごに御手をおろさせたまはん事、

候べき」と、とどめ申たりければ、

(上・絵五)

(上・詞六)

頼朝、「げにも」とおほしめし、とどまりたまふ所に、あんのごとく、夜討からめとつて、庭上にひつすゆる。よりとも、御らんあつて、「いしくも申たる市法師かな。ち、おほともがつたへき、さこそよろこび申さん(大友)に、急(烏帽子)ぼし子にせん」とのたまひて、おほともの左近の将監よしなをとめされつ、大すみ、さつまをくださる。ときめんぼく、世のきこへ、なに事かこれにまさるべき。去

間、(頼朝)よりとも、(御対面)ごたいめん(為)のそのために、(青)あを  
(狩衣)かりぎぬ(立烏帽子)にたてゑぼしめし、(広)ひろびさし  
まで御出あつて、「夜討(召)はいづくにぞ。ち  
かうめせ。うけたまはる」と申て、(秋)はぎがこ  
つぼにひつすゆる。頼朝、御覽あつて、「曾  
我の五郎時宗とは、(女)なんぢが事か」「さん  
候」。「親のかたき、(祐)すけつね(経)をうつ(討)はだうり  
といひながら、京、(鎌倉)かまくらのおりのほり、道の  
(末)すゑにてもうたずし、頼朝が(祝)いわるのざ  
しきに血をあゑす(条)でう、(謂)いはれなし。こ  
れ、ひとつ仇ならば、(祐)すけつね(経)老人をこそ  
うつべきに、(当番)たうばん(者共)のものどもに手を  
おほくおうする(条)でう、(謂)いわれなし。これひ  
とつかたきうつての(頼朝)其後、頼朝が内所  
をさしてきり入。よりともにてきをなす  
(条)でういわれなし。とく、申候へ。時宗うけ  
たまはり、「さん候。(祐)すけつね(経)、京、(鎌倉)鎌倉のお  
りのほりにも、よきものあまためしつかひ、  
うつとき(時)ハ五十騎、百騎、うたぬときも二十(騎)き、  
三十騎にハをとらず。われらハ君の御ふしんを  
かうむり、身ハ独身となりはて、(兄弟)おととい  
より外みつくものもなきにより、(付)つきそひ  
まいりねらへども、折をゑざれば、(得)うちもゑず。  
此(狩倉)かりくらの人(込)ごみをよき折からとぞんじ、  
まぎれいつてうつて候。御ちやうのごとく、(予)か

ねてハすけつね(祐)老人をこそうつべき  
とぞんじて候らひしに、(存)當番(面)処のめん  
が、なかく(乗)に名のり出、(臆)おくびやうがたなつか  
うて、(逃)にげあし(足)ふむがにくさに、(威)おどしの  
ために太刀風をおうせ候らひつるなり。  
(重)ぢうおん(恩)を正にかうむり、(妻)さいし(子)を(扶持)ふち  
し、(助)身をたすけ、人となるかたが、  
これ程に御所中へ夜討の入てみだる、  
に、(誰)たれこそす、(進)み命をすて君のご  
(前)ぜん(罷)にまかりた、(立)んと仕るものもなし。  
(外)とざまなれども、(者)にたんと、御内の五郎丸  
より外、御用(立)にたつべきものハなし。御  
一族にておハしますも、(敵)てきの四郎殿こそ  
(膝)ひざのくちをわられて、(感)足がかなはでおひ  
きあれ。そのほかの手をいども、(外)みなめし出  
しじつけんあれ。むかうきすはよもあらじ。  
(逃)みなにげ疵にて候べし。かゝるおくびやう  
なるやつばらに、(奴原)あつたらしき御所領をい  
たづらにたばんより、(賜)我等にすこし下され、  
(御芳志)ごはうしにあづからば、(少)これほどまでは  
よもにげじ。たとへば、(孫)祖父伊藤ハ、(我)不  
忠の者にて候へば、(子)しそん(我)われらにいたる  
まで、(御憎)おにくみあるは御だうり。さりながら、  
(書)念所には「怒りをたて。恩にむくへば、(報)仇も  
(味)みかたとなる。親子兄弟なれども、(方)欲心

内に(合)ふくめば、(外)とにてきたう(敵)と(説)とかれたり。

祖父伊藤も(時)ひがごとなし。むかし、源平両

家(筋)のとき、天下の弓とり、二ちやうの弓に

一すぢのつるを(弦)かけわづらい、きのふ源氏へ

ひく弓を、(引)けふ(今日)ハまたひきかへて、平家に

ひくやからもあり。かやうに人ハせし

かども、伊藤は心ふたつなくされて、

弓箭をとりしなり。かやうに弓や

取ものハ、たのもしき弓とり、たう

ぜん(千)とこれを申なり。それに、伊藤が

し(子孫)そんをばうとみはてさせたまひ

て、めい(命)をつぐべきたよりもなし。

籠鳥の雲をこひ、壺中魚の、わ

づかに泡(息)にいきつぐふせいにて、

いきてかひなきうき身となり、と

てもがし(死)におよばんより、おやのかた

き(討)とうちじにして、名を後代に

あげんため、我君」とこそ申けれ。

(上・絵六)

(下・詞一)

頼朝、きこしめされて、「あふ、よの事

さてをきぬ。仇うつての其後、よりと

が内所をさしてきり入、よりともにてき

をなす(条)でういわれなし。とくく申候へ。」

時宗うけたまはり、「さん候。御たづねな

れば申べし。たとへば、祖父伊藤ハ、

不忠の者にて候ども、な(名)にある者

のし(子孫)そんなれば、いかでかたやしはてん

と、二人に一人をもめし(出)いだされ、けん

めい(命)のち(地)に、すこしなりともあん(安堵)ど

をなしたまはらば、たとへす(祐)けつね

うちたくとも、おもひこらへて、本領に

なぐさみてもすぎぬべし。されば、弓取

の命にかへておしきは、けんめい(懸)の本領

なり。それに、すこしものこらずめし上ら

る(円)のみならず、あまつさえすけつね

に一(上)ゑんに下され、うへみぬわし(振)とふる

まひし、かゝるうらみのかずく(恨)の、そ

のみなもとをたづぬるに、君の御身

にとどめたり。すけつね(祐)よりもさきに

ぞと、心をかけ申せしに、それに手

にたつものもなし。五郎丸、きぬかつ

き、かみゆりさげてありつるを、女と

おもひ、見そんじて、さうなくとられて

候ぞや。五郎丸だになかりせば、あつ

ばれ、君の御命ハあやうかりつる

ものをや」。

(下・絵一)

(下・詞二)

頼朝(者)、きこしめされて、「あつばれ、大かう(剛)のものかな。たとひ、さありとも、我まへ(思)にては、さなしとこそ申すべきに、おもひの色を(残)のこさず申つるこそ、しんべう(神妙)なれ。たゞし、おや(親)のかたきをうたんとて、継父會我(知)にしらせるか。京の小次郎、越後のぜんじ(禪師)、二のみやのあねむこ(姉婿)、母に(知)しらせざりけるか。とくく申候へ。時宗(承)うけたまはり、「さん候。小次郎ハ本所に(伺候)しこ(仕)うつかまつり、ひまなき身にて候へば、よりあふ事なきにより、しらする事も候はず。越後のぜんじ(禪師)は、法師の身にて(経)きやうよみ、念仏申、おや(親)の跡とふその子(殺)を、ころしてな(何)にせん(喜)と、しらする事も候はず。二のみやのあねむこ(姉婿)は、よしなきこ(男)じうとにくみし、一所けんめい(懸命)、うしなハんと、よも申さじとぞんじ(存)、しらする事も候はず。母にはしらせたく候ひつれども、年よりあ(残)とにのこりゐて、わかき子どもを出し(物思)たて、ものおもハぬとるうおや(いお親)の、よ(世)にハあらじとぞんじ(存)、しらする事候はず。

明星大学蔵 奈良絵巻『十番切』 釈文

柴田雅生

継父はなさぬ中、継子継母のむかし(昔)より、中よき事のあらざれば、しらす(知)せず(問)

とこそ申けれ。「今ハとうべき事もなし。」

はやく、いとま(暇)とらせよ(取)と、おほせ出されける(仰)ところ(祈)に、すけつねが(経)ちやくし(嫡子)犬坊(子)

と申すわつぱ、いづくからか(声)はきたりけん、時宗を見るよりも、こえも(聲)おしま(惜)ずわつ

となき、もつたるあふぎ(逆持)にて、ときむねが(時宗)おもてをちやう(面)とぞう(打)たりける。時宗

これを見、につこと(笑)わらひあふ。「ゆしくも(打)うつ犬坊かな。うらやましやな。なんぢハ、夕べ(汝)

父をうたせつ(悲)、けさ(今朝)手にかけてうつこ(打)とよ。かなしきかなやわれ(我)は、五つや三

つの年よりも、父をなんぢがおや(親)にうたせ、野(伏)にふし山(隠)にかくれ(居)て、心をつくし、さ(肝)もをけし、つゞや(酒)はたち(二十)にあまつ(余)

て、うちけるだにもうれしきに、さこそ(討)犬坊が、心も(風)つくさずをこのけなくうつを、

うれしくおもふらん。これも君の御おんぞや(思)。わどのがうで(腕)にかなふまじ。うつてはらだ(和敷)

にいるならば、いかほどもうてや、犬坊(打)と、かほ(顔)ふりあげてうたせけり。

御前なりし人(当座)、「弓取に

あたうる事、もつ(勿)たいなし」と申て、

たう(当座)の恥辱を

あたら(与)る事、もつ(勿)たいなし」と申て、

犬坊を

いだきいるゝ。

(下・絵二)

(下・詞三)

かゝりける所に、二たんの四郎たゞつな、すけ  
 成)の首、太刀の切さきにつらぬいて、御  
 前(参)にまいらせあぐる。頼朝、首を御(実)つけん  
 あり。あらむざんや時宗、今まで(剛)かかうの  
 (眼)まなこを(見張)みはつて、(悪)わろびれざりしす  
 (姿)がたもか(変)はり、(流)涙をながし、(頭)かうべを地  
 につけ、「(痛)あらいた(早)はやくもか(変)はりたまひ  
 けるや。竹馬(打)にむちをうちしより、此方  
 (起)ひと所に(伏)をきふして、(片時)へんじもみえさせ  
 たまハねば、とやましますらん、かくやわたらせ  
 たまふらんと、心(添)をそへておもひしに、(悲)かな  
 しきかなや今ははや、(体)五たい分別(統)つゞ  
 かねば、ありしかたちもか(変)はりはて、(徒)いたづ  
 ら(事)ごとくなりけり。とくして我もかくなりて、  
 (同)おなじ道に」とおもひければ、(包)つゝめどこぼる  
 (涙)るなみだハ、庭の(白洲)しらすもぬれぬべし。

(下・絵三)

(下・詞四)

時宗が太刀を取出し、「これにてきれ」と  
 の御(説)ぢやうなり。時宗、これ見、「(ママ)あらふし  
 ぎや。此太刀は(昨年)おととし京(上)へのぼりし  
 時、(買)四条町にてかひ取、(夜討)今夜ようちも  
 これにてうつ。我等(首)がくびも此太刀にて、(切)き  
 られんこと(不)のふしぎや」と、(言葉)申し事は、  
 此太刀の出処(鷹)をかくさんた(切)めのことば成。  
 去間、「時宗を(鷹)バたか(切)おかにてきれ」との  
 上意(引)なりとて、時宗を(立)ひつたて、(鷹)たか、  
 (岡)おかへぞい(急)そぎける。「たゞ、(世)よのつねのめし  
 (人)うどだにも、(最期)さいごの(体)ていハ面白(剛)し。大強一  
 時宗が最後(見)をみん」といふまゝに、(貴賤)群集をなしにけり。時宗、人の多(座)きをみ  
 て、「(及)あゝら、口(槽)をしや。かほどのくわうざにて、(綱)の恥  
 におよぶ事よ。よし／＼夫も時宗が、(孝)山賊海賊  
 をしたる身にても(養)あらばこそ。父母(付)きやうやう  
 の(間)そのために、(繩)ついたるなわにて  
 有(御注連繩)あいだ、神の前(前)にて  
 (善)佛のまへにて  
 (言)ぜんのつな、(紐)経のひぼ  
 (心)ともいひつべし。心  
 (寄)あらん弓取達ハ、よつて  
 (手掛)てかけ

て結縁せよ、人ぐ」と言  
 まゝに、あう、たかどをかへ  
 ぞいそぎ  
 ける。

(下・絵四)

(下・詞五)  
 たかどをかにもつきしかば、九品の松の  
 下にしきがわをしかせなをりけり。時宗、心  
 におもふやう、「此松の下にてきられん事ハ、  
 ひとへに九品のじやうど、おもふなり。い  
 かに太刀取、なわとりも、すこしのいとまを  
 賜たびたまへ。時宗が最期に、じやうどの  
 三部經を、あらくだんじてきかせ申  
 さん。それほつけ一ぜうのくりきはたつ  
 とし。有がたきみだゑしやうぼうまんどく  
 のくらい、三世諸佛出世ノ本懐ハ衆生  
 成佛の直道なり。ぐちなるしゆじやう  
 にいたりてハ、かうじやうのほうもんなり。  
 座ぜんしゆぎやうのでん地にいたりがたき  
 者ハ、六宗をせうしてごくらくにおふじやう  
 す。一指を捧る其ときハ、大せんせかいもこ  
 にあり。たけをうつ、たうを見て、悟道する  
 事ふんみやうなり。めうらく大師の御しやく

にいわく、しよきやうしよさん、たざいみだ、さい  
 ほうおもつてさきとせり。ゆいしんのみだ、さい  
 こしんのじやうどなれば、ほんらいむとうざい、  
 何所有南北とくわんずべし。それ六字  
 みやうがうを集るきやうろんハ、けごんきやう  
 にて南の字をつくり、阿舎經にて無の  
 字を作り、方等經にて阿の字を造り、  
 大般若にて弥の字を造り、法花經を  
 もつて陀の字をつくつて、南無阿弥陀仏  
 と申なり。十方三世佛、一切諸菩薩つ、  
 八万しよせうぎやう、皆是阿弥陀」ととく  
 時ハ、聴聞の老若、かうべを

かたむけ、時宗を  
 おがまぬ人は  
 なかりけり。

(下・絵五)

(下・詞六)  
 彼時宗と申ハ、おさなかりける時よりも、  
 勤行をこたらず。一心三觀の月ハ、無明の  
 暗をてらし、くわんねんのまどの前にハ、ま  
 ゆに八字の霜をたれ、一實中道の  
 くるまハ、無二無三の門に轟、一乗菩提の  
 こまハ、びやうどう大悉の苑に嘶。等がく

一てんの時鳥ハ、みやうがく大ぜうのみねに  
(鳴)なく。入重玄門のうぐひすは、げゝ衆生  
(谷)のたにゝさへづり、しよぎやうむぢやうの  
(散)春の花は、是しやうめつぼうの風に  
(滅)ちり、せうめつ(生)己の秋の月ハ、ぢやく  
(滅)めついらくの雲にかくる(萬)。ばんざんに  
(念)ふん(仏)し、かくのごとくとあるものを。「たゞ  
(念)ねんぶつを申べし」と、およぶもおよばざ  
(助)りけるも、みなねんぶつを申けり。  
(鷹)是ハ、たか(岡)をかにての事。さても君の  
(和)御前には、わだ(秩父)、ち(殿)ぶ、北条どの、そせう申  
(兵)されけるやうハ、「かの時宗と申ハ、大かう一の  
(助)つわものなり。又ハ名にあるものゝ子孫  
(思)なれば、たすけて御をき候へ」と、そせう  
(助)申されたりければ、頼朝もなひ(内)く  
(思)たすけたくおほしめさるゝ折から、此人々  
(嬉)訴訟の旨うれしくおほしめされ、自身  
(安堵)あんど(遊)の御状をあそばし、甚平右馬尉  
(下)にくださるゝ。御所、甚平右馬尉、たて文  
(走)持てはしり、たか(鷹)岡にもつきしかば、「其  
(斬)時宗、なきつそ。子細あり。わだ(和)、ち(秩父)ぶ、  
(衆)北重殿、君へ申させたまひて、助たま  
(膝)はん御教書のあり。これ(小)、おがみ候へ」と  
(高)時宗がひざ(置)に(手)をく。こて(繩)のなわをゆる  
(誑)されて、たからかにこそようだりけれ。

「下状、(相模)さがみの国の住人、(會我)そがの五郎時宗  
(寛)はやくくわんゆうす。夫、くわをてんじて、忠と  
(信)なす。しんかうハ人にあつて、しかもみやうの  
(知見)ちけんたり。おやに孝のふかきものは  
(親)天道のたすけ有。是によつて頼朝  
(感)も憐愍をはげまし、非をいたして理  
(感)になせり。天下こゝにかんをうす。そくばく  
(刀)の弓取、たうけんをさしおき、(涙)なんだ袖  
(濕)をうるをうし、おんごんにきくもの、ひる  
(肝)を(銘)いきもにめいじたり。これをさら(誅)にちう  
(罰)ばつし、(死罪)しざいになしをはん(箕裘)なば、き(家)う  
(絶)のいゑたえ、弓馬の道ハながくすた  
(仰)りなん。あおいでもなをあまりあり。  
(張)はんくわいにくらぶれば、時宗ハ(高祖)まされ  
(張)り。ちやうりやうにあハすれば、かうその  
(威勢)なせし(剛)いせるたり。一天四海のそのう  
(剛)ちにかくれぬかうのものなれば、先の  
(忠)非をかへして、今より後ハ、頼朝にちうしん  
(宇佐美)たるべし。本領なれば、うさみ、くづみ、か  
(津)わづ、三かのしやう、(永)ゑ(安堵)いたいあんど(河)の御状  
(頼朝)如此。源のよりと(朝)判」とぞよみ  
(貴賤)あげける。きせん  
(上下)あつとかんじつ、  
(感)見聞衆、一度に  
(高)あつとかんじつ、

ゆゑしの人の  
くわほふやとよろ  
こぼざるは

なかりけり。

(下・絵六)

(下・詞七)

去間、時宗ハ御教書いたゞき、泪をながし  
つゝ、「あゝら、ありがたや。おなじくハ此御状  
を舎兄(助成)すけなりもろともおがむと  
だにおもひなば、いかゞはうれしかるべき  
に、そ(惣領)うりやうのすけなり、今はうき世  
におハせねば、時宗ひとりながらへて、  
惣領をつぐともいきたるしるしある  
まじい。たゞく切らせたまへ」と申(を)こ  
てぞ、きられける。見る人目をおどろ  
かし、きくものこれをか(感)んじけり。頼朝「あ  
はれ」とおぼしめし、「かほどか(剛)ふなるつわもの、  
はれ(上)」と(古)おぼしめし、「かほどかふなるつわもの、  
しやうこも今も末代もためしすくなき  
ゆへなり。あら人神にい(現)わへ」とて(富士)ふじのす  
そのにやしろをたてて、あにの宮・おと(弟)の宮  
と申てい(代)わゝせたまひけるとかや。今たうだ  
るにいたるまでお(親)やのかたきをう(敵)つ人、

(下・絵七)

(下・詞八)

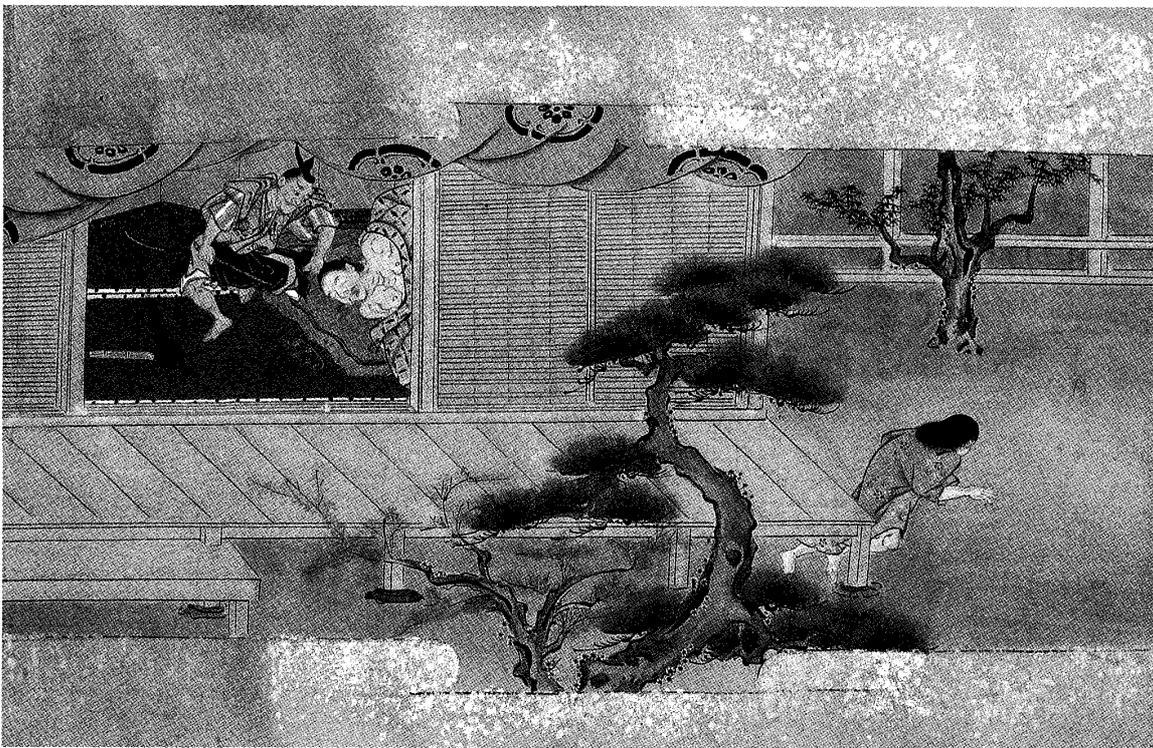
このやしろにて  
いのれば  
たちまち  
かなえ  
たまふ  
なり。

参考文献

須田悦生・田中文雅・服部幸造・佐藤彰彦『寛永版舞の本』(三弥井書店、一九九〇年)  
麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系 舞の本』(岩波書店、一九九四年七月)  
三浦俊介『十番斬』(福田晃・眞鍋昌弘編『幸若舞曲研究 第九卷』(三弥井書店、一九九六年二月)所収)



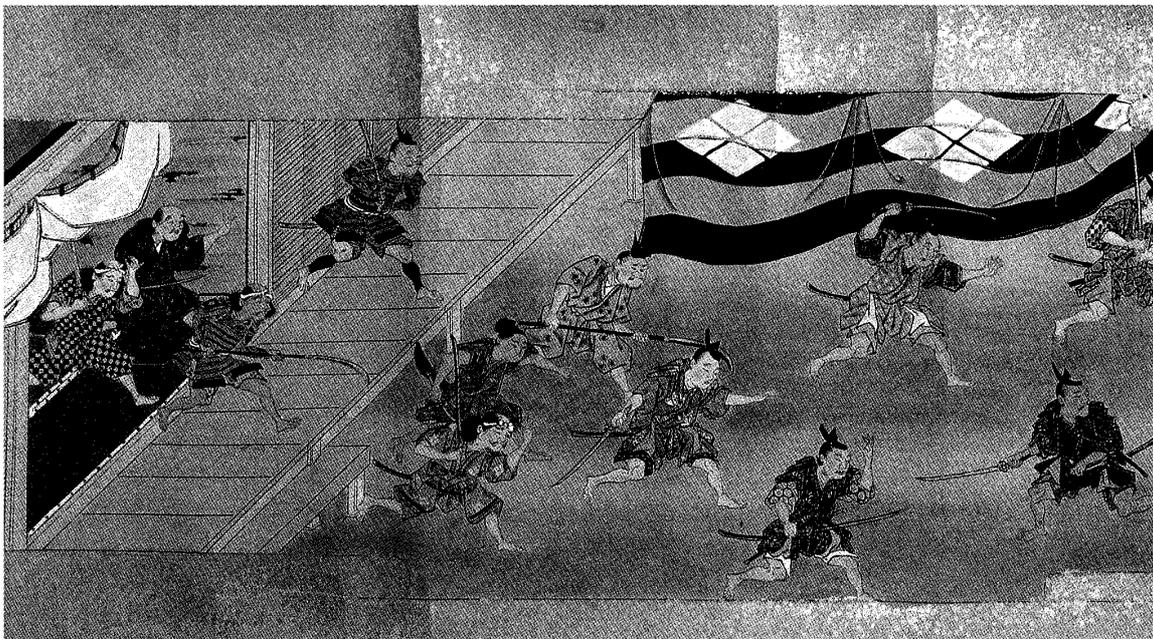
上・絵一



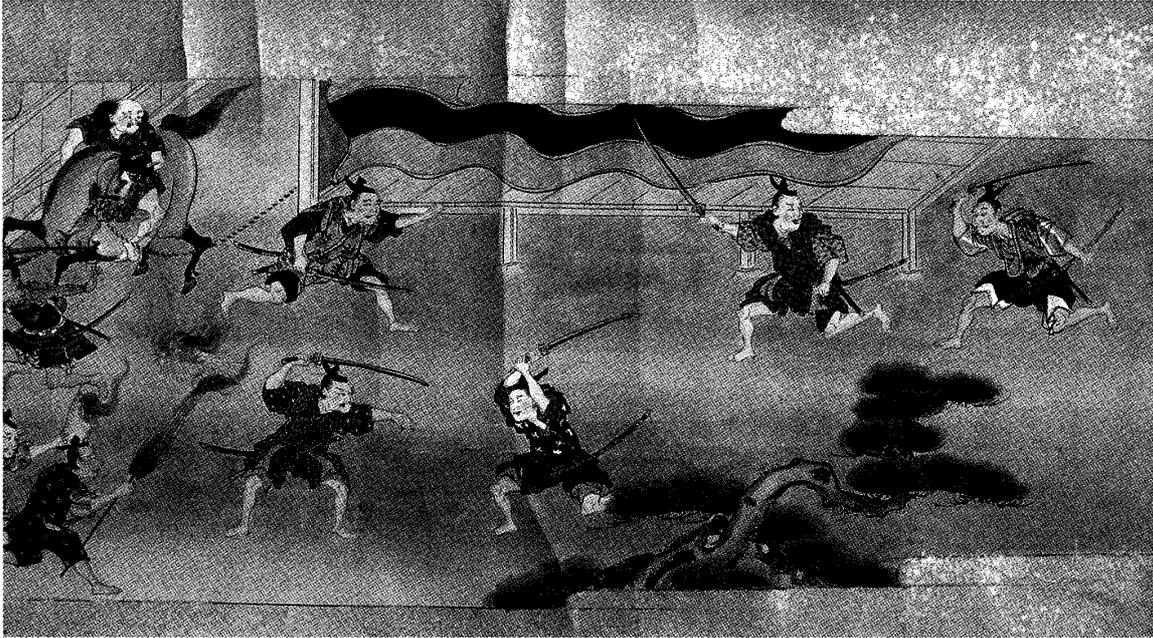
上・絵二



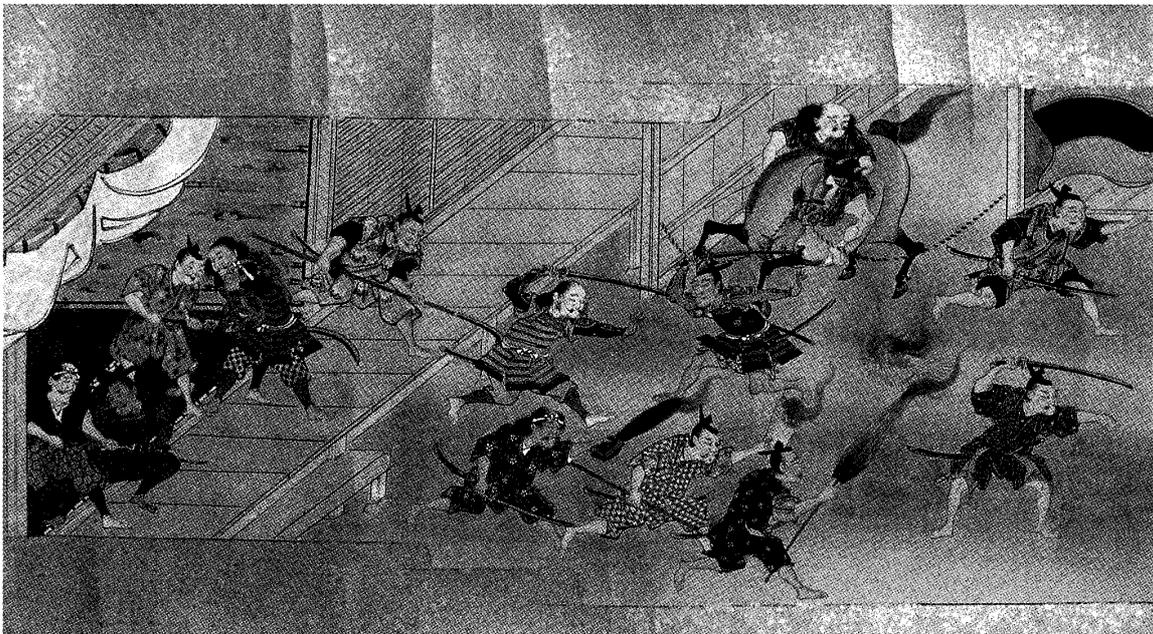
上・絵三 (右)



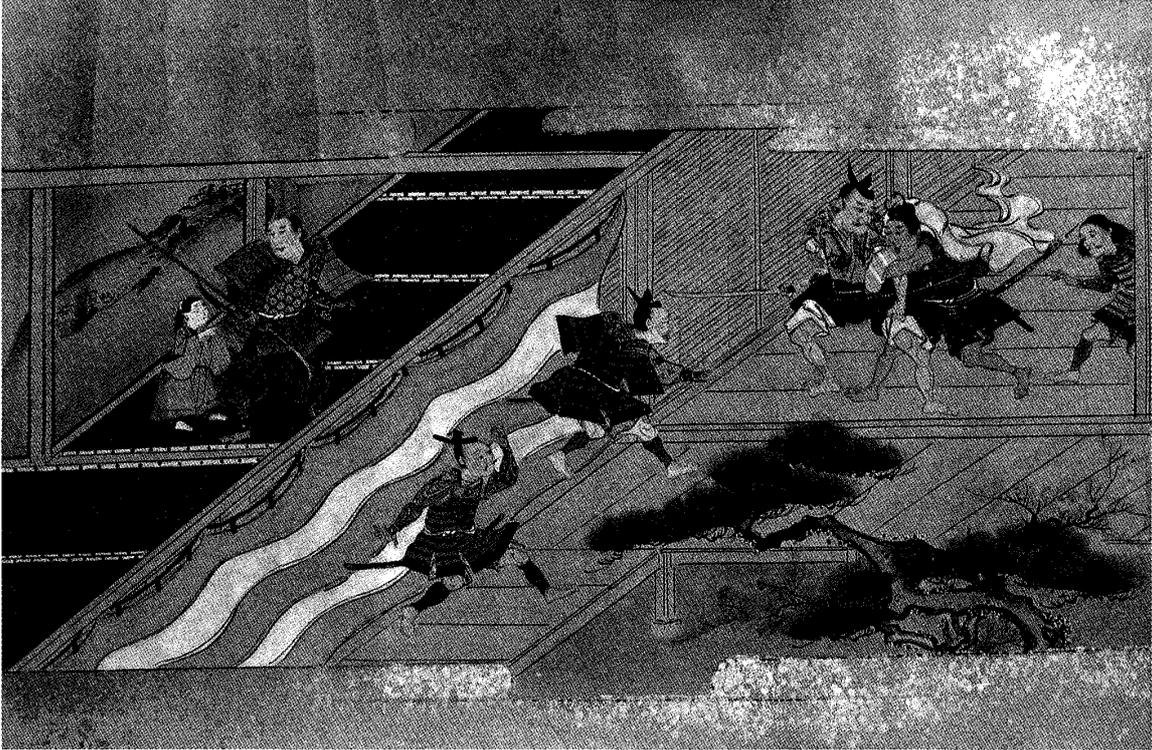
上・絵三 (左)



上・絵四（右）



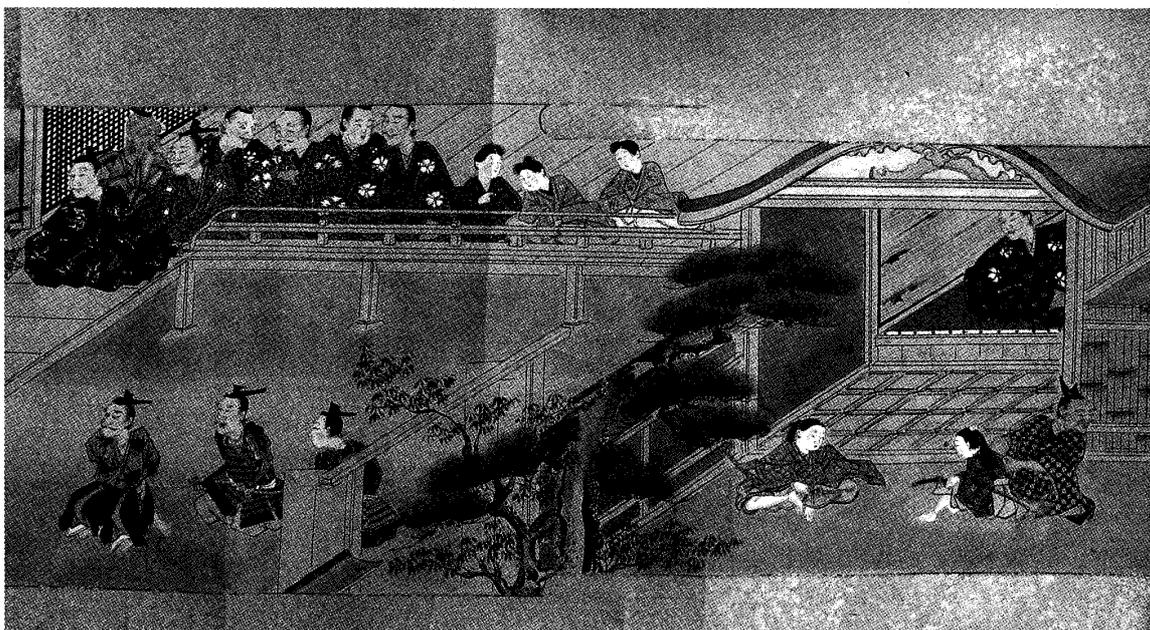
上・絵四（左）



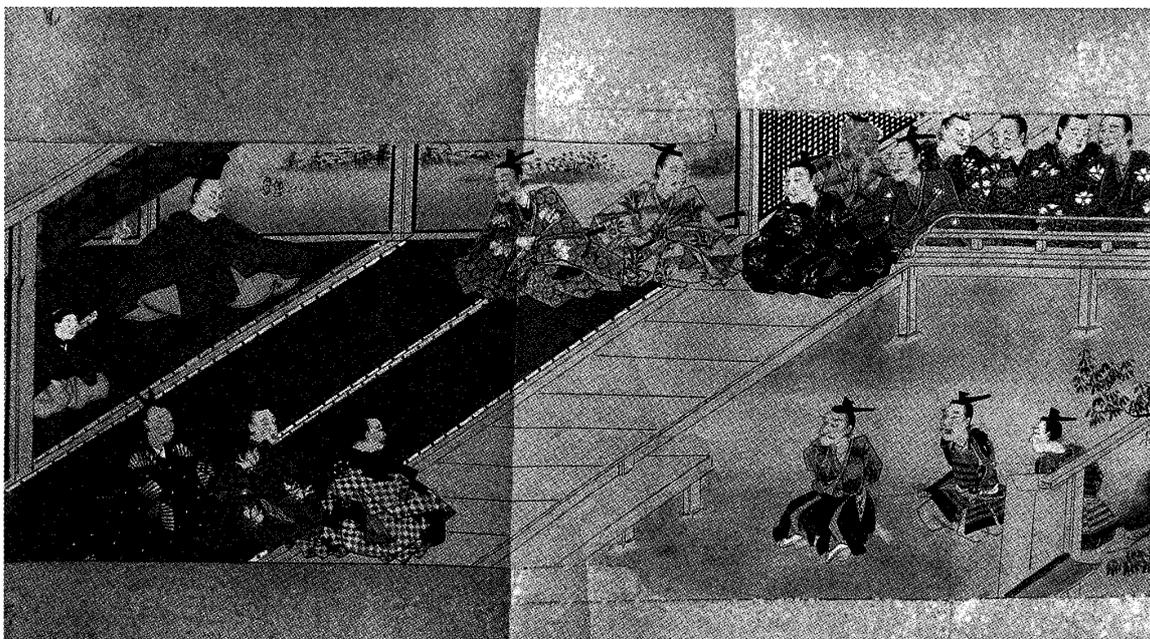
上・絵五



上・絵六



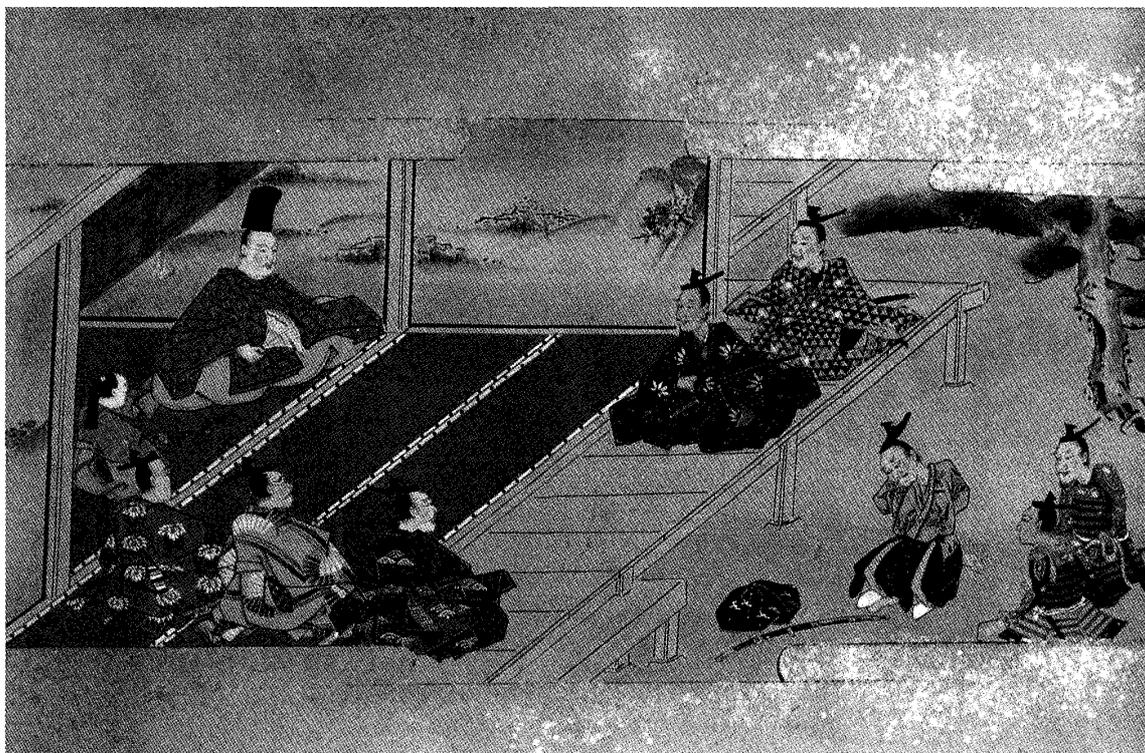
下・絵一（右）



下・絵一（左）



下・絵二



下・絵三



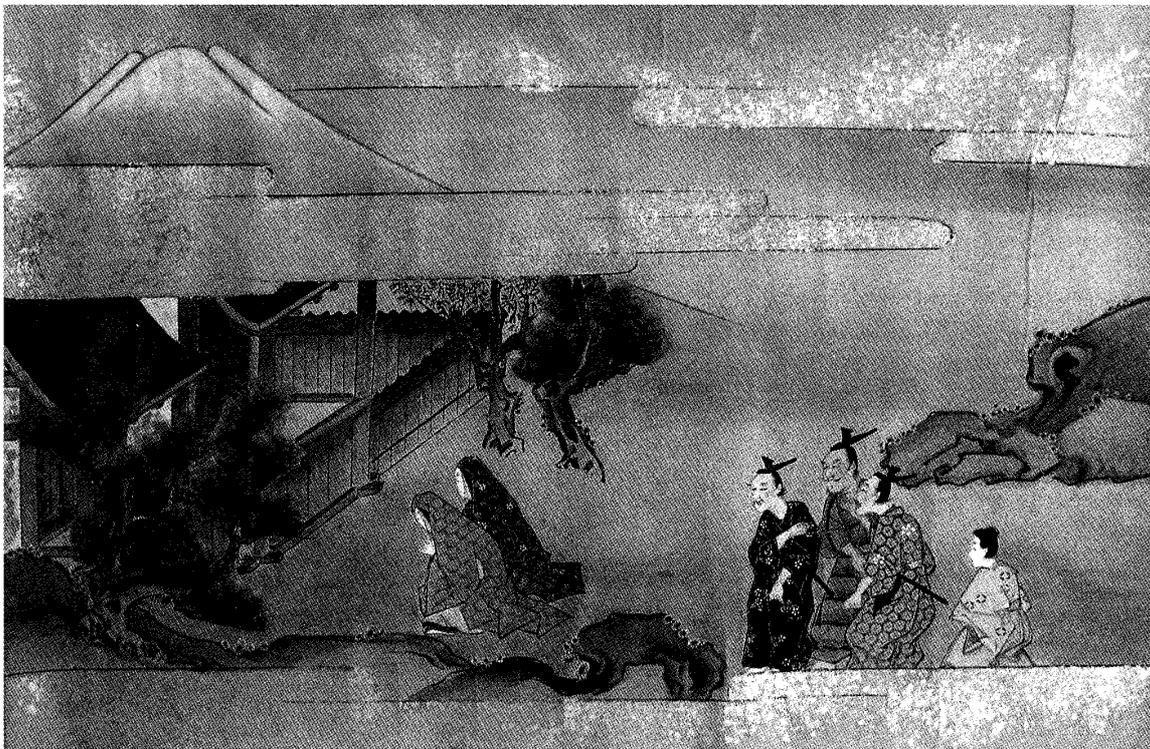
下・絵四



下・絵五



下・絵六



下・絵七